



No. 128

ティーブレイク

Tea Break

卒業後証書

桜の季節が始まる少し前は、別れの季節である。所々で、卒園式や卒業式が執り行われている。そして次に桜の季節が到来すると、今度は一転して、新たな出会いの季節となる。わずか数週間の中に、別れと新たな出会いが起こることになる。卒業式を迎えた方々も、その直ぐ後にもっと素晴らしい新たな出会いが待っていることがわかっているのに、園児から学生に至るまで、泣いている。

そして、年長者が一転して年少者。これが所々で起こる。小学6年生のころには、それなりに遅く見えていたものが、中学1年生になると、とたんに幼く見えるようになる。「立場が人を作る」とは言うが、これはある意味、とても面白いものである。

ところで、卒業してから入学があるのであり、卒業よりも入学が先であることは、まず無い。すなわち、別れが先で、新たな出会いはその後になる。けれども、これが人生である。このことは、熱力学の第二法則ということまでの完全性はないものの、「投資が先で、回収は後」という資本主義の原則くらいに、当たり前のことである。

であるから、これを逆にしようとすると、色々と問題が起こったり、得るものが少なかったりする。現に、転職の場合には、上記の原則と逆のパターンになることが殆どなので、何かと後味が悪い。

けれども、こうしたときによく思い出すが、3年くらい前に突然辞めていったW君である。「修行をして腕を磨きたいから、鍛錬のための場を変えたい」というようなことを言って、転職先も決まっていなかった状態で辞めていった。ただ、飛び立ったあとは、一片の濁りも無く、清々しいものであった。

そしてその後には、また別の出会いがあることはあつ

たのだが、その別れそれ自体がとても悲しかったことを今も憶えている。

翻って、プロの世界には、入学だけがあって、卒業は無い。現に、そこには入学式のようなものはあるが、卒業式というものは無い。

我々の業界も、合格祝賀会が派手に催され、新人研修は盛況である一方で、弁理士会の総会は、いきなり黙祷から始まる。最初のころは、実はかなり違和感があったのだが、最近は慣れた。そして、自分にとって「黙祷」というのは、全く縁のない世界の出来事についてのものであったことが、だんだんと実感のこもった意味のあるものとして捉えることができるようになって来た。

今年も何人かの方が亡くなられた。中には知人も居た。この数は、自分が年を重ねるに連れ、次第に多くなっていくのであろう。けれどもやはり、プロの世界には、入口だけがあって、出口が無い。あるのは、寿命の終焉による突然の幕切れだけである。

そうして、この世を去った後に、「黙祷」という名の卒業後証書をもらうことになる。

先月は、「卒業」と名のつく曲を随分と耳にしたが、今月に入って聞くことは、もう無い。そして自分はもう、卒業式の無い世界の住人であることに慣れてしまった。そうした実感の中で、今は春の柔らかな日差しを浴びている。

けれどもいずれは自分も卒業後証書対象になるであろう。そんなことを思いながらふと上を見上げ、頬に当たるまだまだ冷たい風を感じながら、黙祷をささげた数人の面々を思い浮かべつつ、桜が散る並木の中を歩いて行ったのである。

(正)